

◇◆国際アーサー王学会日本支部◆◇

○●2006年度年次大会報告●○

日本支部の2006年度年次大会は、下記のとおり開催されました。

[日時] 2006年12月16日（土）

[会場] 日本女子大学目白キャンパス

[開会の辞] 13:00 支部会長 原野昇

[研究発表(1)] 13:05~13:35

発表者 渡辺徳明（独文）

司会 春田節子（白百合女子大学）

[研究発表(2)] 13:35~14:05

発表者 小川直之（仏文）

司会 福井千春（中央大学）

14:10~17:00 シンポジウム—ガウェイン裁判—

小路邦子（英文・コーディネータ）

不破有理（英文）ウェールズ伝承、頭韻詩

小宮真樹子（英文）マロリーのガウェイン

林邦彦（独文）ドイツ中世文学のガウェイン

嶋崎陽一（仏文）『メルラン続編』のゴーヴァン

17:10 総会 議長 原野昇

18:00 懇親会於上海料理「揚子江」目白店

大会運営当日は、日本女子大学の学生さんが受付・お茶の手伝いをしてくれました。大会終了後に中華料理店にて開催された懇親会も盛況でした。皆様の暖かいご協力に感謝。（事務局）

＜総会の承認・報告事項等＞

〔承認事項〕

1. 活動について

2005年度年次大会、ニュースレター19号発行、Bulletin発送が滞りなく行なわれた。また協賛事業への参加という新しい取組があった。

2. 決算

2006年度の会計報告が行なわれ、2007年度予算案が承認された。本部へのBulletin代は以下のとおり遅延なく収められた。

\$18（冊）×92（人分）(*\$1=¥119.67)

*2006年登録会員数85名

3. 新入会員

高名康文氏（仏文／福岡大学）

（推薦：横山安由美、高木眞佐子）

〔報告事項〕

1. 個人情報保護法に伴い学会住所録掲載情報を更新中。
2. 2007年度年次大会開催校 中央大学
3. 2008年度年次大会開催候補校 白百合女子大学
4. 幹事会開催時期のお知らせ
2007年：定例一回（秋）
2008年：定例の他、役員改選に伴う臨時幹事会を一回開催
2009年：新旧役員引継のため臨時幹事会を開催

〔会員へのお願い・他〕

- a. ニューズレターに載せるアーサー王関連の書誌の更なる充実を目指すため、会員各位へ協力をお願いする。
- b. 2006年はアーサー王学会の知名度を上げる協賛事業が盛況であった。増加を目指し、会員各位へ協力をお願いする。
- c. 第22回レンヌ国際アーサー王学会への参加希望者は、団体・個人を問わず自主責任で国際大会本部へ届け出る事。日本支部事

務局はその責任を負わない。

- d. ニューズレター19号のミスについてお詫び。

〈2006年度大会 要旨〉

個人研究発表

『ニーベルンゲンの歌』のパロディー化 —クリエムヒルト描写の変化をめぐって—

渡邊徳明

『ニーベルンゲンの歌』のクリエムヒルトは英雄ジーフリトの妻としてミンネ(愛)に満たされ、財に恵まれ、その美しさを喧伝され、栄誉に包まれた、宮廷社会における価値高き存在であった。このような宮廷社会には、社会的に地位高き者は、内面もそれに連動して優れている、という価値観が基盤を成している。英雄ハゲネに夫を殺され彼女は、内面的喪失感と、王妃の地位を失う社会的な損失を味わうのであり、彼女のハゲネへの猛烈な復讐は、この奪われた宮廷社会における存在価値を取り戻すための、必死の闘いである。このような宮廷的価値への執着は、シュタウフェン朝最盛期の 1200 年前後の政治的エリートであった騎士たちや貴婦人たちの自負心・気風と切り離せぬものである。他方、シュタウフェン朝が滅亡する 1250 年ごろに書かれた、『ヴォルムスの薔薇園』A のクリエムヒルトは、「戯れ(splil)」として英雄たちに死闘を演じさせるが、そこには前述のような宮廷的価値観への執着とは無縁の、軽快さ・軽薄さが感じられる。宮廷文化の理念そのものの希薄化が見られる。

アーサー王の「仙境の国」における元イスラム教徒の活躍—『ブイヨンの庶子』における至高の騎士ユオン・ドゥカーン—

小川直之

十四世紀フランス語の『ブイヨンの庶子』は、武勲詩とアーサー王ロマンスとを巧妙に

つなぐ興味深い挿話を語っている。遂にメツカを攻略したエルサレム王国ボードワン王は、十字軍選りすぐりの十二騎士を率いて紅海の彼方、アーサー王と妖精モーガンらの「妖精の国」へ遠征する。騎士の一人ユオン・ドドウカーンがこのエピソードの主役である。彼は「至高の騎士」にのみ実現可能とされる二つの試練（金の角笛を鳴り響かせ、からくり人形が護る園からバラを摘む）を難なく成し遂げ、アーサーの称賛を浴びる。この元ムスリムは、十三世紀に成立していた『エルサレムの歌続編』諸詩の主要人物である。衰退し続ける十字軍の現実を補填する目的をもつこの文学では、相次いで改宗したイスラムの英傑らがキリスト教騎士へと変貌して十字軍を敢行するユートピアが描かれる。ユオンを主人公とする『ブイヨンの庶子』中の「ミニチュア版アーサー王ロマンス」は、十字軍を謳った武勲詩群が紡いだ夢の結論だったと言うことができる。

シンポジウム—ガウェイン裁判—

コーディネータ 小路 邦子

「ガウェイン／ゴーヴァン裁判」というこれまでにない形式でシンポをやって下さい、と事務局から連絡をいただいて、いいですよ、と気軽にお答えして 1 ヶ月後。再度、承諾確認のご連絡をいただき、漸く気がついたのは、わたしがコーディネイトして司会をするという意味だったのか、ということでした。これは大変だ。ガウェインを何で裁くのか。やはり女性をあちこちで口説き回ったという罪でしょうか。そう言えば、英国では礼節の模範とされるガウェインも、大陸ではすっかり色男にされてしまっています。しかし、大陸でもガウェインは初めからそんな風に描かれていた訳ではないということを、通時的に概観してみたら面白いだろう、ということで仏独

英から4の方に検察官と弁護人としてそれぞれの国と時代と作品を通じ、ガウェイン像の変遷をあぶりだしていただき、かつ彼を裁いてしまおうという野心的な試みとなりました。果たしてこの試みは上手く行くのでしょうか。

幸い、不破先生がマロリーに出てくるエタードの件を審議しようと提案して下さり、的を絞ることができました。彼はペレアスとエタードとの仲を取り持つことを約束しながら、彼女と関係を結びペレアスを裏切ったということで告発されることになりました。そこで、彼に罪のありやなしや、もしも罪があるならばその罪の軽重はいかほどであるかを、聴衆の皆さんを陪審として判断していただこうということにしました。初めに訴追側と弁護側の主張を開陳し、さらに、裁判である以上は証人も必要だ、という訳で、春田先生と増山先生のお二方を告発と弁護のあとに証人喚問をして、それぞれの立場からガウェインについて述べていただきました。最後に質問やディスカッションの後、判決を下す、という手続きを取ることとしました。

なお、*Sir Gawain and the Green Knight* は今回の裁判では証拠として採用しないことと致しました。これは英文学の人にとってはガウェインを礼節の鑑とする印籠とも言える作品であり、これを持ち出すと裁判が成り立たなくなる怖れがあるからです。

さて、まず初めに小路がガウェインの幼年時代を描いた「謎の美少年」型の12世紀後期のラテン語作品 *De Ortu Waluuani Nepotis Arturi* をご紹介した後、作品時代順にそれぞれ、独文は早稲田大学大学院の林邦彦さんに「ドイツ中世文学におけるガウェイン」、仏文は嶋崎陽一先生に「13世紀の散文アーサー王物語」、英文は不破有理先生に「ウェールズの伝承と『頭韻詩アーサー王の死』」、さらに同

志社大学大学院で現在英国のリーズ大学に留学中の小宮真樹子さんには「トマス・マロリーにおけるガウェイン」ということで各自の告発や弁護を展開していただきました。じつは、打ち合わせの段階では、弁護は小宮さん1人と、大変にガウェインの旗色が悪かったのですが、それを知った嶋崎先生が当日突如弁護側に鞍替えされ、訴追側と弁護側それぞれ2人ずつになりました。

残念ながら林さんには、ご用意頂いた4作品のうち半分の *Erec* と *Iwein* の2つしか時間の関係でご紹介いただけず、*Parzival* と *Wigalois* はハンドアウトでのご紹介だけになってしまいました。休憩後の質疑応答の時間に余裕があればご紹介いただこうと思いましたが、活発なディスカッションに、その時間を取ることができませんでした。

嶋崎先生には *Lancelot du Lac* と *La Suite du Roman de Merlin* をご紹介戴きました。不破先生には、ウェールズの *Beddau stanzas* や *Trioed Ynys Prydein* に描かれたガウェイン、さらに *William of Malmesbury* の年代記にも触れていただき、*Alliterative Morte Arthure* でのガウェイン像と彼の行動の影響を明らかにしていただきました。最後に小宮さんにはマロリーの典拠である *Suite du Merlin* とマロリーの *Le Morte Darthur* で同じエピソードがどのように異なって描かれ、それによってガウェイン像がいかに変わったかを明らかにしていただきました。

検察側証人としては春田先生に証言していただきました。法的に見た場合ガウェインの行動は債務不履行であるが、契約内容が不明確であるということでした。弁護側証人の増山先生は、12世紀から14世紀のイタリアでのガウェイン像を証言して下さいました。そこでは、イタリア独自の庶民の手本、良識の代表者としてのガウェイン、非常に純情で女

性に愛されるガウェイン像が紹介されました。

さて、質疑応答も大変に活発でした。渡邊浩司先生からは、クレチアンでは騎士の鑑であるが、『散文トリスタン』で悪いイメージが絶頂となったとご指摘がありました。また、高橋勇先生からは英國のガウェイン・ロマンス 12 本中 11 本が北方起源で、ウェールズ北端からスコットランドにかけて多く、ガウェイン像は良いとのことでした。しかし、ロンドン付近でできた *The Jeaste of Sir Gawain* では悪いイメージで描かれているとのご指摘がありました。

最後に、判決を出す直前に池上忠弘先生と高宮利行先生から *Sir Gawain and the Green Knight* を取り上げないのはけしからん、との異議申し立てがあり、裁判官である小路はちよっと腰が引けてしまいまして、判決を来年に持ち越すことにしてしまいました。「勝訴」と「不当判決」という垂れ幕を用意して、裁判に勝っても負けても小宮さんに駆け回つてもらおうかと思っていたのですが、やりそこなったのが返す返すも残念です。

＜パネリストによる発表概要＞

ウェールズ伝承と『頭韻詩アーサーの死』におけるガウェイン像 不破有理

ウェールズ伝承におけるガウェイン像を分析には、Geoffrey of Monmouth の *Historia Regum Britanniae* の影響の有無を峻別する必要がある。後世のアーサー王物語の人物像はジェフリの描いた人物像によって定義化されているからである。ウェールズの古詩にはガウェインの墓への言及があるので、古伝承にガウェインが登場することは間違いない。ただし、ジェフリ以前の最古のアーサー王物語 *Culhwch ac Olwen* に「アーサーの姉の息子で甥」とガウェインは紹介されているが、後世の加筆との指摘もある。また「探索の旅から

手ぶらで故郷に戻ることのない男」とは、ジェフリにみられる能弁なガウェインとの評判が「必ず結果をもって帰る男」としての人物像を生んだとも考えられる。つまり、ガウェインの交渉能力も含め、肯定的な特質が古いウェールズ伝承に裏付けられているとは確定できないのである。

Malory 以前の作品『頭韻詩アーサーの死』においてガウェインは *worthy, valiant* などと呼ばれ、ガウェインの評判を前提としているようである。しかし交渉に長けたはずのガウェインもアーサーの使者でありながら、ローマ皇帝に無礼な言葉を何度も浴びせ、不意に臣下の首を刎ねて逃げ帰るという事態を引き起す。また戦闘においては、武勇は認められてはいるものの、判断力の欠如に伴う指揮官としての資質に疑問を抱かせるような描写が作品全体として見られるのである。礼節のガウェイン卿とは程遠いガウェイン像と結論した。

トマス・マロリーにおけるガウェイン

小宮 真樹子

本発表では、マロリーにおけるガウェインの性格描写を、特にペレアスとエッタードとのエピソードから考察した。

原典の『続メルラン』ではペレアスは身分の違いゆえに愛を拒絶されたが、マロリーはエッタードを愛情の欠落した婦人として描いたため、高慢な彼女との結婚はペレアスの立派な振る舞いに相応しい報奨ではなくなってしまった。

また、約束を破りエッタードを誘惑したガウェインはペレアスらに裏切り者だと罵倒されたが、ガウェイン自身は一切の弁明を行わない。そして湖の貴婦人ニニーヴは「神の正しい裁き」としてエッタードを罰したが、ガウェインを糾弾しようとはしなかった。

では、この一見不実な振る舞いは、エッタードがいかに愛するに値しない女性であるかをペレアスに示すために、ニニーヴと違って魔法の力を持たないガウェインにできた唯一の手助けだったのではないだろうか。

ドイツ中世文学におけるガーウェイン

林邦彦

ドイツ中世文学におけるガーウェイン（ガーヴァーン）像は、基本的には、個々の作品の原典とされる作品に左右される形となる。『エーレク』『ヴィーガーロイス』では、アルトゥース王の宮廷を代表する模範的な騎士としての役割を与えられ、『パルツィヴァール』でも、ガーヴァーンの物語は形の上ではパルツィヴァールの物語に回収されるものの、両者の関係は相補的なものでもあり、ガーヴァーンの物語が一概に否定的に描かれたものだとは言い難い。しかし、『イーヴェイン』においては、ガーウェインは武勇の点では優れ、主人公イーヴェインの能力を計る物差しとなるものの、その騎士活動の姿勢や彼の抱く価値観は、作品中で重大な欠陥を露呈する。

十三世紀の散文アーサー王物語—『メルラン続編』におけるゴーヴァン— 嶋崎陽一

マロリーの『アーサーの死』中にある、ガウェイン（ゴーヴァン）がペレアスの恋人であるエタード（アルカード）を寝取った挿話は、13世紀の散文物語『メルラン続編』に由来する。ただし原話では、この出来事は、「打ち負かした敵になぶり者にされる騎士」、「美しい騎士と小人とから求愛されて、小人を選ぶ乙女」、「戦っている騎士を憶病者呼ばわりし、傍観しているだけの騎士に付き従う乙女」など、「珍事の野」という場の力によって起きた一連の特異な事件のうちに属するもので、「女に求愛する友人を退けて、自らがそ

の女と寝ることで、結婚の仲介を務める」という、逆説的なユーモアに彩られたテーマ設定が根底にある。マロリーの翻案ではこの点が看過されているために、ガウェインをことさらに冷酷な人物として扱うエピソードとなってしまった。

<証人喚問>

—Gawain 無罪！Pelleas 有罪！— 証人喚問

—証人 I (被告側？原告側？本人も立場が判っていない検察側証人)春田節子

本当の民事裁判では、Gawain は Pelleas から「債務不履行」で告訴されたとしても、“to do all that lyeth in my [Gawain's] powere to gete you [Pelleas] the love of your lady”という約束の内容が「不確定」なため「契約」が成立せず「無効」になる可能性が大きい、ということです。

そもそも、Pelleas を嫌う Ettarde を野次馬連中が責め立てる、というのが大きなお世話。同じくストーカー気味の Elaine (“The Fair Maid of Astolat”)に狙われた Launcelot のせりふにもあるように“love muste only aryse of the harte selff, and nat by none constrainte”ですから。

Pelleas を（おそらく「アブナイやつ！」と感じて）拒否した Ettarde は正しいし、彼女こそ最大の被害者で、Pelleas をストーカーとして告発、さらに The Lady of the Lake を、mind control して死に至らしめた罪で告発することを勧めます。Gawain も嘘をつきましたが、さっさと追い出しちゃったことだし、これ以上追求しても。

けっきょく、Pelleas がしつっこく変なペフォーマンスを続けたために、社会的にも経済的にも自立した女性 Ettarde が破滅に追い込まれてしまう、というお話じゃないんですかこれ？教訓：みなさん、ストーカーにはくれぐれも気をつけましょう。

—イタリアのガウェイン—証言 II

弁護側証人 増山暁子

イタリアではガウェインは素晴らしい勇者として早くから名声が高く、既に12世紀初頭にはイタリア北東部で、アーサー王に次いでその名を持つ多くの人物の記録が残っている。モデナ本寺(1099-1106)の浮彫りでも、先頭を切って馬を駆る騎士は左からArtus、右からGalvaginusと刻まれ、やはりガウェインはNo. 1の騎士であった。

しかしガウェインがイタリア民衆の趣好にぴったりの、気取らない自然体の活き活きとした独自の新鮮な姿で大活躍しているのは、なんといっても物語歌カンターレの中である。

14世紀初頭の“Morale”では、ガウェインは道徳と良識の手本に選ばれている。14世紀中期の“Ponzella Gaia”では、宮廷中の騎士から慕われる強く美しく一途な恋を貫く申し分のない騎士として歌われている。

トリスタンやラヌスロットがどちらかと言えばイタリア上層階級に好まれていたが、ガウェインは人間味溢れる愛すべきヒーローとしてイタリア民衆を魅了してきた。従ってイタリア人はガウェインの味方であり、彼を擁護するであろう。

＜ガウェインシンポジウム—第二弾？—＞

本シンポジウムは闘争な質疑応答にもかかわらず決定的な判決がないまま終わってしまいました。そこでもう一度、ガウェインをテーマに別の作品も議論してはどうかとの提案が複数の参加者から寄せられています。皆様のガウェインへの高い関心をかんがみ、事務局では前向きに検討していきます。

△▼ 計報 ▼△

ロベール・ド・ボロンをはじめフランスのアーサー王伝説に大きな功績を残されたアレクサンドル・ミュシャ氏が今年はじめ逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。佐佐木茂美先生がお寄せくださった追悼文を以下に掲載いたします。(事務局)

アレクサンドル・ミシャ先生逝く

1995年、『アレクサンドル・ミシャ教授(ソルボンヌ) 記念論文集』(Mélanges Alexandre Micha)の仏/独での刊行に先立ち、二名の編集責任者(Danielle Buschinger(イルハルト・フォン・オベルグの『トリストラント』版本等の著者)、およびMichel Zink(『ロマニア』誌主幹))から執筆依頼があった。筆者は折から『トリスタニア』、『ロマニア』などへの論文執筆/掲載が進行中で躊躇った末に、お引き受けする事となった。それ迄の19年間(1975-1994)の国際アーサー王学会『会誌』(BBSIA)への拙稿(ビブリオ)の分析とともに、わが国におけるアーサー王学の総括ともいべきもの Découverte du Moyen Age français au Japon を寄稿した。刊行なって、お祝状を差し上げようとした矢先にミシャ先生からお札状が届いた事がいまも強く印象に残る。単に礼状、拙論を読まれた上の所感にとどまらず、筆者のドクトラの公開審査に遡る、一先生は審査員のお一人であった—そして以後の研究活動に過分のお言葉があった。

指導教授かつ主査でもあったソルボンヌのジャン・フランセ(Jean Frappier) —「国際アーサー王学会」の提唱者であり創立者。1948年創立時に遡る最重要のメンバーがミシャ先生となる、一先生より各審査員宅を訪問、事前審査を受けるようとの指示があった。その前年1967年の秋、論文提出がなされていた。ミシャ先生宅では中世フランス文献中の「運命」研究の令嬢(長女)による『ロマニア』誌上の連載が予告された時期で(指導教授の意向で)話題はまずそこに向いた。シャルル・ドルレアンの中世ラテン文献との断絶を前提とした筆者の中世フランス文学内での「運命」の遡源研究と重なるもので、詩人の内的世界を分析した手続きをこのとき高く評価いただ

いた。審査員一致(*très honorable*)で通過した論文はフラピエ先生の推挙、パリでの刊行が実現し(再稿以下の手続きをも先生に負う)、渡仏した筆者は(1974/7)出版社よりの一巻を先生の別荘に持参、この時に国際アーサー王学会の会長である先師よりわが国関係の書誌作成の指示があり、20年後の『アレクサンドル・ミシャ記念論文集』の拙稿となる。この折、拙書のミシャ先生への献辞の口述もされ、フラピエ先生の数日後の逝去となる。

2007年一月末、ミシャ先生の訃報が届いた。1905年4月10日の南フランス東部モンテリマールのお生まれ、享年101歳...4-5日後、御家族に国際電話を差し上げたところ、今や錚々たる十六世紀学者の令嬢よりいま一つの訃報がもたらされた。ミシャ先生の御子息の一人が後を追われた—(残る御子息がソルボンヌで教授職にある)。

上記『記念論文集』(副題)、そのタイトルは『ラ NSロ、昨日と今日』(Lancelot-Lanzelet, Hier et Aujourd’hui)である。1939年、クレティアン・ド・トロワの写本研究をもって研究を始められた先生は『クリジエス』の版本、1972年からおよそ十年をかけての九巻を数える版本『ラ NSロ』と著書『ラ NSロ/聖杯』、ロベール・ド・ボロンの研究を残され、一世紀を超えるたゆみない、俗に惑いなき、傑出した学究の生涯を閉じられた。

(佐佐木茂美)

○● 書誌担当者変更のお知らせ ●○

このたび、都合により独文書誌担当が四反田想先生から、横山由弘先生になりました。2007年度年次総会席上で改めて皆様にご報告いたします。(事務局)

◆◆ 文献情報 ◆◆

書誌担当がご用意くださった文献情報です。積極的に

ご活用ください。日本支部では今後とも会員の皆様に役立つ国内文献情報の提供に努力してまいります。(＊当ニュースレターには『国際アーサー王学会書誌年報』に掲載予定分は除く)

○● 仏文 ●○

(書誌担当: 嶋崎陽一)

<研究(単行本)>

原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007)liv, 242pp.

<研究(雑誌・論文集等)>

天沢退二郎「〈トリスタンとイゾー〉物語群」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007)63-74.

原野昇「Pèlerinage de l’Ame の新発見断片写本」『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会)88(2006)115-22.

原野昇「『ロランの歌』」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007)21-35.

長谷川太郎「演劇の誕生(十三世紀まで)—修道院から都市へ」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007)157-68.

福本直之「悪狐ルナールの活躍『狐物語』」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007)126-37.

福本直之「中世の落語「ファブリオ」」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007)138-49.

細川哲士「フランソワ・ヴィヨン」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007)186-201.

井上富江「La possibilité du songe ou le rêve dans la littérature médiévale en France」『別府大学大学院紀要』9(2007)1-9.

井上富江「オック語—その栄光と影」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』

- (東京:世界思想社、2007) 212-17.
- 岩本修己「リュトブフ」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 150-56.
- 松原秀一「聖人伝」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 9-20.
- 西澤文昭「大押韻派」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 202-11.
- 小川直之「Une devineresse musulmane et sa prophétie sur l'invasion chrétienne en Palestine dans l'histoire poétique de la croisade (2)」『人文研紀要』(中央大学人文科学研究所) 56 (2006) 151-74.
- 岡田真知夫「古仏語覚え書き(2)」『人文学報』(首都大学東京都市教養学部人文・社会系) 377 (2006) 1-14.
- 小栗栖等「ギヨーム詩群その他」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 36-43.
- 大高順雄「遠くて近い古代」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 44-52.
- 佐佐木茂美「散文物語」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 99-108.
- 佐佐木茂美「シャルル・ドルレアン」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 180-85.
- 佐佐木茂美「『散文トリスタン物語』内の記述と発話行為の問題 : Ecrits et voix narratives dans le Roman de Tristan en prose (tome IX, §1-§45)」『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会) 90 (2007) 200.
- 瀬戸直彦「作家主義か作品主義か — ペイレ・ヴィダルの抒情詩の並べかたについて」『比較文学年誌』(早稲田大学比較文学研究室) 43 (2007) 1-15.
- 瀬戸直彦「ペイレ・ヴィダルの「パレスチナの歌」— baiser volé のモチーフを中心にして」『早稻田フランス語フランス文学論集』(早稻田大学文学部フランス文学研究室) 14 (2007) 1-33.
- 瀬戸直彦「トルバドゥール」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 218-27.
- 篠田知和基「地中海地域の昔話 — 「バジルの鉢」から見た地域的文化と風俗」『広島国際研究』(広島市立大学国際学部) 12 (2006) 179-94.
- 篠田勝英「『薔薇物語』前篇」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 109-16.
- 篠田勝英「『薔薇物語』後篇」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 117-22.
- 篠田勝英「『薔薇物語』論争」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 123-25.
- 鈴木覺「十四世紀以降の演劇」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 169-79.
- 太古隆治「フランス語の成立」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 3-8.
- 高頭麻子「おとぎの国の恋 — マリ・ド・フランス」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 75-87.
- 渡邊浩司「『伝記物語』の変容 — ギヨーム・ル・クレール作『フェルギュス』をめぐって」『仏語仏文学研究』(中央大学仏語仏文学研究会) 39 (2007) 25-67.
- 渡邊浩司「クレチアン・ド・トロワ」原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東京:世界思想社、2007) 53-62.

横山安由美「中世の宝石箱 — 「写実的」物語」
原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人の
ために』(東京:世界思想社、2007)88-98.

<翻訳>

フィリップ・ヴァルテール『中世の祝祭 — 伝説・
神話・起源』渡邊浩司・渡邊裕美子訳(東
京:原書房、2007)332pp.
ギヨーム・ド・ロリス、ジャン・ド・マン『薔薇物語
(上・下)』篠田勝英訳(東京:筑摩書房、
2007)517pp, 470pp.
『シリーズ世界周航記〈2〉: ルイ・アントワーヌ・ド・
ブーガンヴィル『世界周航記』・ドゥニ・ディド
ロ『ブーガンヴィル航海記補遺』』山本淳
一・中川久定訳(東京:岩波書店、2007)
229pp.
ミシェル・ド・セルト「<神秘体>あるいは欠けた
身体」横山安由美訳『国際交流研究 : 国
際交流学部紀要』(フェリス女学院大学)8
(2006)137-49.

<その他>

原野昇「フランス中世文学作品邦訳リスト」原野
昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のため
に』(東京:世界思想社、2007)xxii-xxvi.
原野昇「フランス中世文学史年表」原野昇(編)
『フランス中世文学を学ぶ人のために』(東
京:世界思想社、2007)xxvii-xxxiii.
松原秀一「フランス中世文学への手引き」原野
昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のため
に』(東京:世界思想社、2007)228-42.
岡田真知夫「原文で読むための文献案内」原野
昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のため
に』(東京:世界思想社、2007)xxxv-liv.

<補遺>

福本直之「Comment “tenir ses manches” ? —
Notes sur un passage du *Roman de Renart*」

Br.I 『広島大学フランス文学研究』 24
(2005) 94-100.

前田弘隆「武勲詩定型表現と動詞 OIR」『広島
大学フランス文学研究』 24 (2005)
396-412.

鈴木覺「Sur le vers 53 du *Segretain Moine* du
Ms.19152 de la Bibliothèque Nationale de
Paris」『広島大学フランス文学研究』 24
(2005) 303-08.

高名康文「人と会話をする動物 — 『狐物語』第
12 枝篇の場合」『広島大学フランス文学研
究』 24 (2005) 509-20.

◆◆ 独文 ◆◆

(書誌担当 : 横山由広)

今回も文献の検索にデータベースを用いました(特に
CiNii, MAGAZINEPLUS)。遺漏などのご指摘やリストア
ップの基準についてのご意見をいただければ幸いに存
じます。

<研究 (単行本) >

岩波敦子『誓いの精神史 中世ヨーロッパの<こ
とば>と<こころ>』(講談社、2007 年 7 月)
216pp.
武市修『中世ドイツ叙事文学の表現形式—押韻
技法の観点から—』(近代文芸社、2006 年
2 月)305pp.

<研究 (雑誌・論文集等) >

會田素子「中世ドイツ騎士文学における
truhæze—その典型的性格と『ローレンゲ
ル』に描かれた truhæze ケイイ」慶應義塾
大学独文学研究室『研究年報』 24 号
(2007 年 3 月)33-64.

Ariizumi, Yasuo (有泉泰男) : Über die
Einschätzung des Mittelalters von der
Aufklärung bis zum 20. Jahrhundert. 上智
大学ドイツ語圏文化研究所『ドイツ語圏研

- 究』22号(2005年)21-27.
- 土肥由美「イスカリオテのユダ—福音書から後期中世聖書劇へ—」中央大学人文科学研究所『人文研紀要』53号(2005年10月)319-51.
- 浜野明大「初期中高ドイツ語版『創世記』—三つの写本についての研究動向—」上智大学ドイツ文学会『上智大学ドイツ文学論集』42号(2005年12月)71-91.
- Hamano, Akihiro (浜野明大) : Die Anderweltigkeit der Minnegrotte im „Tristan“—Die Suche nach der neuen Lokalisierung der Minnegrotte. 上智大学一般外国語教育センター『Lingua』17号(2006年)63-87.
- 檜枝陽一郎「不定詞と分詞の相克について—中世低地ドイツ語から—」京都ドイツ語学研究会『Sprachwissenschaft Kyoto』5号(2006年5月)1-18.
- 石川光庸「『ヘーリアント』詩人の語り口」京都ドイツ語学研究会『Sprachwissenschaft Kyoto』2号(2003年5月)150-52[例会講義要旨].
- 岩井方男「『ニーベルンゲンの歌』と共同体(3)」早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会『教養諸学研究』118号(2005年4月)1-20.
- 岩井方男「『ニーベルンゲンの歌』と時間(1)」早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会『教養諸学研究』119号(2006年1月)11-29.
- 岩井方男「『ニーベルンゲンの歌』と予型論」早稲田大学大学院文学研究科『早稲田大学大学院文学研究科紀要』51輯第2分冊(2006年2月)153-66.
- 岩井方男「『ニーベルンゲンの歌』と時間(2)」早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会『教養諸学研究』120号(2006年5月)1-20.
- 岩井方男「『ニーベルンゲンの歌』と伝承(1)」早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会『教養諸学研究』121号(2006年12月)1-28.
- 岩井方男「『ニーベルンゲンの歌』と伝承(2)」早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会『教養諸学研究』122号(2007年3月)1-21.
- 金子哲太「中高ドイツ語における完了表現について—『哀れなハインリヒ』の用例を手掛かりに—」ドイツ文法理論研究会『エネルゲイア』32号(2007年6月)79-94.
- 河崎靖「比較言語学と比較神話学 その3」京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会『ドイツ文学研究』報告51号(2006年3月)39-50.
- 河崎靖「ルターと初期新高ドイツ語」京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会『ドイツ文学研究』報告52号(2007年3月)85-104.
- 長縄寛「Hartmann von Aue の„Iwein“における不定関係代名詞について」関西大学独逸文学会『独逸文学』47号(2003年3月)81-103.
- 長縄寛「古高、中高ドイツ語の不定関係代名詞 sô wer sô, swer について—Otfrid の „Evangelienbuch“と Hartmann von Aue の „Iwein“を中心に—」京都ドイツ語学研究会『Sprachwissenschaft Kyoto』2号(2003年5月)153-156[例会発表要旨].
- 長縄寛「関係文を導入する sô, und について」阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論叢』47号(2005年)83-102.
- 長縄寛「時、条件の副文を導入する sô, als(ô)について」関西大学独逸文学会『独逸文学』50号(2006年3月)39-58.
- 長縄寛「『クードルーン』に見られる不定関係代名詞構文」関西大学独逸文学会『独逸文

- 学』51号(2007年3月)111-35.
- Öhlinger, Bernhard: Hartmanns „DER ARME HEINRICH“ in diversen neuzeitlichen Rezeptionsrealisaten. 上智大学ドイツ語圏文化研究所『ドイツ語圏研究』22号(2005年)46-63.
- Oswald, Dagmar: Inszenierungen im „Tristan“ Gottfrieds von Strassburg im Spannungsfeld medialer Umbrüche. *swîc unde lâ geschehen, daz wir'z mit ougen ane sehen.* 上智大学ドイツ語圏文化研究所『ドイツ語圏研究』20号(2002年)28-49.
- Oswald, Dagmar: Transferprozesse in den höfischen Kulturen des europäischen Mittelalters. 上智大学ドイツ語圏文化研究所『ドイツ語圏研究』22号(2005年)64-77.
- 尾崎久男「*Rotes Gold* か *aurum rutilus* か?—中世ゲルマン諸語における「赤い黄金」について—」京都ドイツ語学研究会『Sprachwissenschaft Kyoto』5号(2006年5月)19-39.
- 尾崎久男「ルター訳あるいはティンダル訳の影響:英語聖書欽定訳における同族目的について」京都ドイツ語学研究会『Sprachwissenschaft Kyoto』6号(2007年5月)13-29.
- 尾野照治「ドイツ中世のイタリア系教育詩人 Thomasin の学識」京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会『ドイツ文学研究』報告52号(2007年3月)1-29.
- Schwob, Anton: Die Erfahrung der Fremde am Beispiel von Berichten über Palästinareisen des 15. Jahrhunderts. 上智大学ドイツ語圏文化研究所『ドイツ語圏研究』22号(2005年)3-20.
- 嶋崎啓「他動詞の反使役化の諸相—再帰動詞と他自動詞を中心にして—」京都ドイツ語学研究会『Sprachwissenschaft Kyoto』5号(2006年5月)56-58[例会発表要旨].
- Shitanda, So(四反田想): Mittelalterliche Epik und ihre Erforschung in Japan und den deutschsprachigen Ländern. 『広島大学大学院文学研究科論集』65巻 特輯号2(2005年12月)1-60.
- Shitanda, So(四反田想): Der Brunnen als Heilige Stätte und Heilstätte vom Mittelalter bis zur Gegenwart. 上智大学ドイツ語圏文化研究所『ドイツ語圏研究』22号(2005年)27-45.
- 須澤通「Mechthild のドイツ語—神秘主義的語彙の発展—」信州大学人文学部『人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』40号(2006年3月)45-58.
- 鈴木桂子「時代としての剣—ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの幻視文学における歴史像」中央大学人文科学研究所編『続 剣と愛と』(中央大学出版部、2006年11月)265-98.
- 高橋明彦「トリスタンの劫罰 II」上智大学ドイツ文学会『上智大学ドイツ文学論集』42号(2005年12月)3-24.
- Takeichi, Osamu(武市修): Verschiedene Ausdrucksmöglichkeiten in der mittelhochdeutschen Literatur — unter besonderer Berücksichtigung der Endreimdichtung —. 関西大学独逸文学会『独逸文学』47号(2003年3月)61-80.
- 武市修「lâzen の用法について—押韻技法の観点から—」関西大学独逸文学会『独逸文学』48号(2004年3月)49-80.
- Takeichi, Osamu(武市修): Das mittelhochdeutsche *an* als Adverbialpräposition — unter besonderer Berücksichtigung seiner Verbindungen mit den Verben auf dem Weg zu den trennbaren

- Verben —. 京都ドイツ語学研究会『Sprachwissenschaft Kyoto』3号(2004年5月)1-23.
- Takeichi, Osamu(武市修): Zum Gebrauch der kontrahierten Formen von *sagen* im Tristan. 関西大学独逸文学会『独逸文学』49号(2005年3月)17-34.
- 武市修「『クードルン(ママ)』に見られる縮約形 その1—*sagen*と*läzen*を中心に『ニーベルンゲンの歌』との比較から—」関西大学独逸文学会『独逸文学』50号(2006年3月)59-80.
- 武市修「『クードルーン』に見られる縮約形 その2—その他の語の縮約形—」関西大学独逸文学会『独逸文学』51号(2007年3月)83-109.
- 武市修「日本人が古いドイツ語を研究する意味」京都ドイツ語学研究会『Sprachwissenschaft Kyoto』6号(2007年5月)51-53[例会発表要旨,自由討論会54-63].
- 寺田龍男「Kriegerbezeichnungen in der Dietrichepik—*helt, degen, recke* und *wîgant* sowie *ritter*—」北海道大学ドイツ語学・文学研究会『独語独文学研究年報』32号(2005年)57-79.
- 寺田龍男「軍記物語と英雄叙事詩(2)—J. ブムケによる「不確定テクスト」(‘der unfeste Text’)の概念を中心に—」北海道大学『大学院国際広報メディア研究科言語文化部紀要』49号(2005年)89-107.
- 寺田龍男「軍記物語と英雄叙事詩(3)—ヨーロッパ中世における二重の主従関係—」北海道大学『大学院国際広報メディア研究科言語文化部紀要』50号(2006年)1-16.
- Terada, Tatsuo (寺田龍男): Literarische Darstellungen eskalierender Schlachten im Mittelalter. Ein Ansatz zum Ost-West-Vergleich, in: „Von Mythen und Mären“ — Mittelalterliche Kulturgeschichte im Spiegel einer Wissenschaftler-Biographie. Festschrift für Otfrid Ehrismann zum 65. Geburtstag. Hg. v. Gudrun Marci-Boehncke und Jörg Riecke. Hildesheim / Zürich / New York 2006, 626-43.
- 横山由広「中高ドイツ語で学びはじめるドイツ語の歴史」慶應義塾大学通信教育補助教材『三色旗』704号(2006年11月)14-19.
- 渡邊浩司「『名無しの美丈夫』と『ヴィーガーロイス』—2つの世界—」中央大学人文科学研究所『人文研紀要』56号(2006年9月)109-49.
- △▼ 英文・その他 ▼△
- (書誌担当:辺見葉子、協力:徳永聰子)
- <研究(単行本)>
- 原聖『ケルトの水脈』興亡の世界史 07(東京:講談社、2007)374pp.
- 家入葉子『ベーシック英語史』(東京:ひつじ書房、2007)124pp.
- <研究(雑誌・論文集等)>
- 福井千春「セレスティナからアビアへ」『中央大学論集』27(2006)59-69.
- 福島治「A Linguistic Commentary on Dante's Vita Nuova (2)」『東京女子大学紀要論集』56.2(2006)105-32.
- 原田英子「困難な道を選ぶ者たち—The Battle of MaldonにおけるByrhtnodの英雄性と家臣たちの反応」『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』7(2007)23-31.
- 辺見葉子「J.R.R.トールキンの『指輪物語』と‘things Celtic’」『慶應義塾大学日吉紀要英語英米文学』50(2007)69-87.
- 池上忠弘「チョーサーの笑い話」—『粉屋の話』を巡って(その2)』『ことばの普遍と変容』

- Anglo-Saxon 語の継承と変容叢書 2 (東京:専修大学言語・文化センター、2007) 51-54.
- 伊藤盡「人工言語ミニ事典 エルフ語(特集 人工言語の世界—ことばを創るとはどういうこと)」『言語』35.11 (2006) 76-79.
- 伊藤盡「中世英國の神話伝説の世界 (13) エド・ワイン王のキリスト教改宗」『英語教育』55.8 (2006) 61-63.
- 伊藤盡「中世英國の神話伝説の世界 (14) 最古のロマンス、ホーン王の話」『英語教育』55.10 (2006) 61-63.
- 伊藤盡「中世英國の神話伝説の世界 (15) ガウエイン卿の結婚—アーサー王伝説外伝」『英語教育』55.11 (2006) 61-63.
- 伊藤盡「中世英國の神話伝説の世界 (16) ガウエイン卿と緑の騎士—新年を祝う中世伝説」『英語教育』55.12 (2007) 61-63.
- 伊藤盡「中世英國の神話伝説の世界 (17) 貴婦人ゴディヴァ—チョコレートに隠された伝説」『英語教育』55.13 (2007) 61-63.
- 伊藤盡「中世英國の神話伝説の世界 (18・最終回) ウィリアムと狼—ひと味違う中世物語の狼男」『英語教育』55.14 (2007) 61-63.
- 仮屋浩子「『三賢王(マギ)の劇』における演劇性に関する一考察」『明治大学教養論集』(2007) 39-61.
- 沓掛良彦「狂詩の愉しみ」『図書』687 (2006) 18-21.
- 松田隆美「テクストからコンテクストへ—中世英文学者研究と現代」*Studies in Medieval English Language and Literature*, 21 (2006) 21-28.
- 松田隆美(共著)『義塾図書館を読む—和・漢・洋の貴重書から』(東京:慶應義塾図書館、2007) 206pp (佐々木孝浩・住吉朋彦と共に著、pp. 93-205 執筆).
- 松田隆美・高橋勇・高宮利行・徳永聰子、他『テクスト・イメージ・コンテクスト:みること』の心性—慶應義塾大学21世紀COE「心の解明に向けての統合的方法論構築」表象 A・B班研究展覧会の記録』(東京:慶應義塾大学21世紀COE 心の統合的研究センター、2007) 235pp.
- 水田英実・山代宏道・中尾佳行・地村彰之・四反田想・原野昇『中世ヨーロッパにおける死と生』(広島:渓水社、2006) 197pp.
- 向井毅「写本アンソロジーから Sammelband へ—「作品集」誕生への胎動を観察する」『文芸と思想』71 (2007) 37-50.
- 中尾祐治「Sir Thomas Malory の Winchester 写本と Caxton 版における *tho, those and thise, these* 等の異同について」『ことばの楽しみ—東西の文化を越えて』田島松二編 (東京:南雲堂、2006) 113-24.
- Oka, Saburo (岡三郎) 'Chaucer's Troilus in a New Comparative Context', in *Beowulf and Beyond*, ed. by Hans Sauer and Renate Bauer (Frankfurt: Peter Lang: 2007) 223-24.
- Takagi, Masako (高木眞佐子) 'William Caxton's Alteration of Text: The Case of Belyn and Brenne from 1480 to 1485' 『杏林大学外国語学部紀要』19 (2007) 121-30.
- 高宮利行「中世と中世主義を超えて(日本英文学会第79回全国大会特別講演)」『英語青年』153.6 (2007) 358-63.
- 高宮利行「大学図書館における洋古書管理への不安」『藝文研究』(慶應義塾大学藝文学会) 92 (2007) 160-68.
- 高宮利行「グーテンベルクの活字を巡って—デジタル技術と HUMI プロジェクトについて」『國文學—解釈と教材の研究』8月臨時創刊号「文字のちから—写本・デザイン・かな・漢字・修復」52.10 (2007) 169-73.
- 高宮利行「音読、朗読そして黙読」*The Round Table* (慶應義塾大学高宮研究会) 21 (2007) 57-65.

高宮利行「ヨーロッパ各国図書館所蔵グーテンベルク聖書デジタル情報化、進化するアーカイヴ—慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター報告書(2001-2006)」(東京:慶應義塾大学デジタルアーカイブリサーチセンター、2006)68-86.

田島松二編『ことばの楽しみ—東西の文化を越えて』(東京:南雲堂、2006).

徳井淑子「涙のドゥヴィーズの文学背景—心と眼の論争」『お茶の水女子大学人文科学研究』3(2007)29-40.

徳井淑子「解題 フィリップ・ペロー『贅沢、豪奢と快適のあいだの富、18-19世紀』『ドレスターイ』51(2007)22-26.

Yoshikawa, Naoe Kukita, *Margery Kempe's Meditations:, The Context of Medieval Devotional Literature, Liturgy and Iconography, Religion & Culture in the Middle Ages* (Cardiff: University of Wales Press, 2007) xi, 193pp.

<翻訳>

ジェフリー・オヴ・モンマス『ブリタニア列王史—アーサー王ロマンス原拠の書』瀬谷幸男訳(東京:南雲堂フェニックス、2007)409pp.

トマス・マロリー『アーサー王物語(5)』井村君江訳、オースリー・ビアズリー挿絵(東京:筑摩書房、2007)344pp.

<書評、その他>

菊池清明「21世紀の洋書棚 言語あるいは文学研究のゆらぎとひろがり—John Hines, *Voices in the Past, English Literature and Archaeology*」『英語青年』153.2(2007)94-96.

小路邦子「アーサー王伝説の世界へ」『ふくろう通信』No.6(Autumn 2007)66-70.

高橋勇「田吹長彦著『ヨーロッパ夢紀行—詩人

バイロンの旅—ベルギー・ライン河・スイス編』』『イギリスロマン派研究』31(2007.4)101-05.

△▼ 学会・講演会のお知らせ ▼△

●第23回中世英語英文学会全国大会

日時: 12月8日(土)・9日(日)

場所: 駒澤大学(東京都世田谷区)

◇◆2007年度 国際アーサー王学会 日本支部年次大会のお知らせ◆◇

日時: 12月15日(土)11時~(調整中)※

※現在プログラム調整のため大会開始時間が暫定的です。最終決定は11月初旬、会員に郵送する大会プログラムにて改めて通知いたします。ご迷惑をおかけしますがあしからずご了承ください。

場所: 中央大学 多摩キャンパス
7104教室(7号館1階)

[個人研究発表] 小宮真樹子氏(英文)、
林邦彦氏(北欧・独文)、田中ちよ子氏(英文)
[シンポジウム] 小路邦子氏(英文・コーディネータ)、渡邊浩司氏(仏文)、高橋勇氏(英文)、
渡邊徳明氏(独文)

[その他調整中]

[懇親会] 18時~ 中央大学生協食堂

大会費: 1000円(学生無料)

懇親会費: 4000円

△▲△ 多摩キャンパスへのアクセス △▲△

○多摩モノレール『中央大学・明星大学駅』から徒歩1分

※モノレールはJR中央線「立川駅」/京王線「高幡不動駅」「多摩動物公園」/小田急線・京王線「多摩センター駅」から接続。

○京王線『多摩動物公園駅』から徒歩○小田急・京王線『多摩センター駅』下車バス○JR中央線『豊田駅』下車バス

◆◇ 2007年シンポジウム予告 ◆◇

「ガウェイン礼賛」 小路邦子

2006年年次大会のシンポジウム報告に記しましたように、昨年は「ガウェイン裁判」とい

うタイトルの下、裁判形式でガウェインの訴追と弁護を行ないましたが、審議の結論を持ち越しました。今年はそれを受け、補う形で「ガウェイン礼賛」というシンポジウムを、裁判ではなく普通の形式で行います。仏文・独文のガウェインを扱った作品から、英語ロマンス、そして「裁判」で証拠として採用しなかったことに異議申し立てのあった英文学の傑作 *Sir Gawain and the Green Knight*までの作品を採り上げ、昨年とは異なった観点からガウェイン像を見ていくことにします。

大陸ではガウェインを主人公とした作品が例外的にしか存在しないのに対し、ブリテン島ではガウェインを主人公とした作品が非常に多く、しかもほとんどが礼節・騎士道の鑑として描かれています。この違いに注目し、これほどブリテン島で好まれたガウェインという人物が昨年の告発にいかに答えうるかを検討し、みなさんの判決を待ちたいと思います。

それぞれご紹介する作品は以下の通りです。

独文 *Diu Crone* 『王冠』(13C 前半)

仏文 *L'Atre perilleux* 『危険な墓地』(13C 半)

英文 英語のガウェイン・ロマンス作品群

英文 *Sir Gawain and the Green Knight* (1400 頃)

■◇□ ▼△▼ □◇■

開催者一同、知的でかつ楽しめるプログラムを提供すべく精力的に準備中です。シンポジウムでは学際的かつ高レベルの議論が期待されます。一方開催校の福井先生、渡邊浩司先生は快適な会場づくりに積極的にご尽力くださっています。多くの皆様のご来場を心よりお待ちしています。(開催校・事務局)

◇◆ 会費納入のお願い ◆◇

右記の通り 2008 年度分会費のご入金をお願いします。払込票はこのニュースレターと一緒にお送りしています。

<郵便振替口座番号>

加入者名: 国際アーサー王学会日本支部

口座番号: 00250-6-41865

会計: 竹中 肇子

年会費: 3000 円(*他賛助会員費・寄付金等)

○● 寄附金募集のお知らせ ●○

日本支部では、一口 1000 円からの寄附金を全ての会員より隨時募集しています。納入意思のある方は、年会費払込票に「寄付 × 口」とお書き添えの上会費と一緒に納入、もしくは大会会場で会計にお支払いください。皆様の暖かいご支援をお待ちしています。(会計)

◇◆ ご住所等変更報告のお願い及び掲載事項の見直し継続のお知らせ ◆◇

ご住所・お電話などに変更があった場合は、事務局まで速やかにご連絡ください。また個人情報保護法に伴う会員名簿の掲載事項の見直しも引き続き受けけています。項目(所属・住所・電話/ファックス・メールアドレス)の掲載中止のご希望がございましたら、ご住所変更等の場合と同じく事務局までお申し出ください(連絡先は下記を参照)。

△▼ 編集・発行 ▼△

国際アーサー王学会日本支部事務局

〒192-8508 東京都八王子市宮下町 476

杏林大学外国語学部

高木眞佐子研究室内 (D-530)

Fax: 042-550-0410

Email: takagi@kyorin-u.ac.jp

* ML リストご利用は

king-arthur@ml.hc.keio.ac.jp

* 学会ホームページ

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/iasjp/>